

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

達磨さま

平成28年10月第1週放送

達磨さまといいますが、縁日に並ぶどっしりとした姿や、また、たとえ転んでも七転び八起きと、強い意志を持って物事に取り組む姿を思い浮かべる方もいらっしゃるのではないのでしょうか？

十月五日は、達磨さまのご命日です。

達磨さまは、お釈迦さまから数えて二十八代目、菩提達磨大和尚として、インドから中国に禅を伝えられた大人物です。そこで、達磨さまのご遺徳を偲び、禅寺では、この日に達磨忌という法要が営まれます。

達磨さまはインドに生まれ、般若多羅尊者の弟子として出家され、インドを巡り、中国に渡って、禅の教えを広められました。

中国に渡った達磨さまには、四人の弟子ができました。その中の一人、慧可との間に、次のような問答があります。

達磨さまの弟子となることを許された慧可は、達磨さまに問います。

「私の心はまだ安らかではありません。師よ、願わくは私の心を安らかにしてください。」それに対し、達磨さまは答えました。

「心をここに持ってきなさい。安らかにしてあげよう。」それを聞いて慧可は、心そのものを探します。

物として心があれば、自分の外を探し回るようになりますし、物でないものとして心があるとすれば、それを外に出して差し出す訳にもいきません。

自分の心を伝えようとすれば、その心は揺れ動いてとらえどころのないものとなるでしょう。安らかでない心といっても、心の様子は、「不安」「いら立ち」「喜び」「悲しみ」など様々な気持ちが混然一体となり、またその様子は刻一刻と変わります。これが自分の心だと思ったものが、気が付いた時には変わっていきます。

そういった心の様子を、達磨さまに差し出すことは困難であったのです。

そこで慧可は、達磨さまに、次のように伝えます。

「心を探し求めましたが、ついに得ることができませんでした。」

それを聞いた達磨さまは、

「どうだ、お前の心は静まっただろう。」と答え、慧可は納得するのです。

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

達磨さまは、坐禅修行の中に心を安らかにするようなあり方について、問いを投げかけ、慧可は真摯に問いに答えることで自分の心のあり方に気づくことができたのでしょ

うでしょう。
この問答は、自分自身の心のあり方について、その姿をよく見定めることが重要であると、私たちに教えています。

— 終 —